春燈

6 月号

June 2014

主宰の句

安立公彦

真砂女忌や海光に立つ紫木蓮

君偲ぶ辛夷の天の青さにも（悼・俊介さん）

畦塗つて遠山は日を輝かす

走り根も春ゆく色に夫婦杉（東金日吉神社二句）

一山のこゑをひとつに時鳥

PDF= 俳誌の salon

安住敦の句

春昼や魔法の利かぬ魔法瓶

『歴日抄』昭和二十九年

「開けごま」も「ちちんぷいぷい」も利かなくなってしまった魔法瓶。今でいうポットであるが、魔法瓶であるから面白い。こうした先生のおどけた句を見ると、私はホッとするのである。この頃の先生は、編集人として周囲への気配りで緊張の連日であった。写真に笑顔のないのを見てもよくわかる。本来はもっと滑稽や風刺の利いた句が詠めた先生であったろうに。

三上程子

PDF= 俳誌の salon

安住敦の句

草紅葉気丈な母で通しけり

『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

「中野青芽に」の前書がある。昭和四十七年青芽句集『草紅葉』発刊に際しての作。句中の助詞の「で」は、対象の人物の性格や境遇をよく知り、情に捉えての強い表現で下五に繋がる。敦は春燈人の来し方や境涯に熟知、序文や文章に熱く心を寄せる。人間性の深みを見る思い。

敦の句は主体が人であれ花であれ、それに対して作者は情の息遣いをもって、読者の胸に迫る作法をする。

中野さき江

PDF= 俳誌の salon

燈下集

○　西川保子

修羅の世にかくもましろく白椿
ゆつたりと曲がる由良川別れ霜
独活小屋の暗がり人のゐる気配
新聞紙に包みくれたりもやし独活
貝寄風や河口に汐の香のあはく

○　上山永晃

啓蟄の身を削ぐ風を畏れけり
ゆつたりとぶれずびびらず地虫出づ
生かされて生くる今生地虫出づ
蛇穴を出づ戦略すでに微に細に
桜餅天助ありての自助なりけり

○　佐藤信子

風評被害つづく大地や草青む
躓きし石も縁や落椿
神将に伽藍の隅の朧かな
枝垂ざくら風が遊んでゆきにけり
枝折戸の開きしけはひや春しぐれ

○　片桐てい女

桑解くや浅間小浅間父子家庭
一円貨に脚光にはか四月馬鹿
縁結ぶ蒸し蛤の朱塗椀
働き蜂休めば不安募りけり
手の内も思ひも読めず花の酒

PDF= 俳誌の salon

○　山内四郎

水仙に雲間より日の躍り出づ
春浅しこれなる浜の一軒家
春浅き風に凭れて歩きけり
滑り台二つ並べり春よ来い
春雨や夕ぐれて来し窓の外

○　神田恵琳

小流れの一握の芹ふり洗ふ
薔薇の芽はや王女の気品そなへをり
灯台の空けぶらせて鳥帰る
放牧の仔馬は母の影を踏み
蘂ながき山吹ながむ日永かな

○　小山繁子

青き踏む詩の未来を信じ踏む
風光る子の片言の糸電話
野遊の指をはなれぬ日の匂
かくれんぼの一抜け二抜け春夕焼
和の国の夕べ焔となる桜

○　小島昭夫

蛍雪の校門のきず柳絮飛ぶ
歩を止めて一人静と妹指せり
マニキュアの色にも季あり桜貝
夕映のさざ波切つて諸子舟
近江路の旅の終りや残る鴨

○　中嶋昌子

羽搏つたび帰心育てて春の鴨
外に出でむ世は繚乱たる春の花
白木蓮に誘はれ開く紫木蓮
ふと醒めて追ふ春暁の夢なりけり
静かなる雨の彼岸となりしかな

○　渡辺若菜

春昼や水槽育ちの鯉の稚魚
たんぽぽや笑顔が背負ふランドセル
太巻の切り口五彩春の昼
紅梅や一棟残る長屋門
小町忌や袂ほつれし紅の糸

PDF= 俳誌の salon

当月集

安立　公彦　選

○　西岡啓子

あたたかや日差をかへす草の艶
人に会はぬ道の長さや木の芽晴
春の山夕日集むるしづけさよ
初蝶来こごろの灯点しけり
手にのせてみづみづしきや落椿

○　齋藤晴夫

啓蟄や玻璃戸をとほる水の紋
草芽立ち朝の喜び充たしけり
お日様へ喇叭水仙声揃へ
人気絶えし古格の御堂鳥雲に
東の間の肩の荷下ろす日永かな

○　中村紀美子

一枝とて縺るるはなし柳の芽
藤芽はや花房の形重たげに
白椿散り敷く坂や逢ひにゆく
おほどかな申の寺護神日永し（東金日吉神社 句）
草鞋供ふる道陸神や春落葉

○　後藤眞由美

霾や高層ビルの玻璃の壁
猫の手の戯れて掬うて花一片
ぜんまいやほぐれて増ゆる里言葉
花の雲彼岸此岸を繋ぎをり
根の国の放生池の亀鳴けり

○　浅木ノヱ

初蝶の水かげろふに生れにけり
馴染みゆく土との暮し涅槃西風
花冷や小鼓を打つ指の反り
花筏鯉の緋色を沈めけり
二歳児にはや兄心葱坊主

PDF= 俳誌の salon

春燈の句

安立　公彦選

夜桜は熟寝の最中起こすまじ　三重　上野　進

咳小さく添へて読経の終はりけり

鷽の胸桜萼の色すでに

くたかけの谺は渓へ囮小屋　茨城　石橋　邦子

閉校の空へ風船上がりけり

水音は春のあしおと西行忌

かたはらに仔猫もねむる看とりかな

畦みちをすべり落ちたる花の塵　埼玉　原田たづゑ

梅見月百歳の天与夫に告ぐ

永き日の夕日赤々気もゆたに

白玉の椿にかはる紅椿

雨あがり一きは目立つ新芽かな　東京　佐藤　玲子

限られし命果てたる涅槃西風

すぐそこに来てゐる桜見ず逝けり

東京の開花宣言花五つ

三月果つ二円切手を買はねばや　東京　横山さくら

花散らす雨の雫の見ゆる窓

一瞬の水面の揺れや風光る

すれ違ふ肩にふはりと桜花

ジャケットの深き折目や夏隣　広島　川﨑　雅子

屋形船流し墨堤花盛り

雪柳しだれて風に逆らはず

白木蓮の百花開きて園静か

リラ冷てふ言の葉ありぬ風の道　静岡　森　嘉夫

花下に佇つ靖国神社大鳥居

青銅の大鳥居撫で花仰ぐ

温泉の効能寂し花浮かべ

懐かしや堅木の炭を割る音す　兵庫　伊藤　百江

貝寄風や洋館の窓半開き

卒寿には卒寿の知恵や山椒の芽

PDF= 俳誌の salon

余　言

安立公彦

生かされて生くる今生地虫出づ　　上山　永晃

春燈二月号からの短期連載、「三先師の病の句」は、充実した読み応えのある内容だった。「著名俳人のうち、五感のうちの三感までも患った方は、そんなに多くはあるまい」の書出しで始まる安住敦編は、ことにその思いが深かった。視・聴・嗅と言えば、生きてゆく上でも欠くことの出来ない感覚である。この文章を見て、改めて私たちは安住敦師の病を再認識させられた。

作者はそれを、国手としての立場から、読み手に分かるように平易な文章で記す。例句の抄出にも具体性がある。改めて精読すべき文章である。

掲出句。上五中七にこめられたテーゼが、「地虫出づ」により、身近な句ごころに変わる表現がみごとである。この下五により、「生かされて生くる今生」が、四季の繰り返しという平静な思いで納得させられる。

退院の一歩ふみ出す花日和　　西谷　良樹

作者は長い間入院の上、幾つかの手術をされたと聞く。退院の時期が花時というのが、その病と訣別する何よりの慶事である。「一歩ふみ出す花日和」には、快癒に向かう作者の思いがしっかりと込められている。

句会案内にある通り、作者は現在二つの句会の指導者である。揚げ雲雀名乗り出づる春の日和を、自身のものとされるよう、快復を願うばかりだ。

採血後この世の花を見にゆかな　　松本　峰春

「入院五句」の前書がある。新年大会出席の折の作者はお元気だった。入院五句の掉尾は、〈万愚節主治医所見の一つを秘〉とある。それは掲出句の「採血後」と関りがあるのか。新年大会でも申し上げたが、作者の春燈表紙絵の版画は絶妙の一言に尽きる。見る人に希望を与える。

「この世の花を見にゆかな」は、春の訪れとともに、繰り返し作者が感じる思いの表現と、今は受け取るばかりだ。

春の鳥小枝のさゆれ残しけり　　近藤　牧男

PDF= 俳誌の salon

春の鳥の代表は鶯である。いま庭木の小枝に止まっていた鶯が、初音の一声を残してとび去った。鶯のとび立った小枝は、のどかな春の空に、かすかな揺れを残している。散文化すると一句の詩情はうすれる。この句「春の鳥」と、「小枝のさゆれ」の取合せが効果的だ。写生の効いた句であり、その写生の表現の中に、豊かな打情が息づいている。〈目刺焼くだけに点しし灯なりけり〉の句もいい。

海凪ぎて何ごともなき桜かな　　岩永はるみ

銚子の犬吠埼辺りの風景が思い出される。この句の眼目は「何ごともなき」。海のおだやかな日は、満開の桜も散ることもなく咲いている、という景をまず思い出す。しかしこの句はもっと深い意味を持つ。

「何ごともなき」は、例えば三年前の大震災にまで考えが及ぶ。災害のないことを願う作者の深い思いが、「何ごともなき」に籠められているのだ。「桜かな」が輝く。

あたたかき笑顔の教へ忘るまじ　林　　紀夫

「悼・俊介様」の前書がある。今月号の「日録」でも触れたが、三月二十日松本俊介さんが逝かれた。昨年の乗鞍三彦、和田孝村さんに続く痛恨事である。俊介さんは以前大動脈瘤の手術をされ、その時の病根が再発したと聞く。二十七日のお通夜の席には、大勢の人が見えた。遺影のお顔が良かった。「あたたかき笑顔」そのものだった。俊介さんは、春燈運営委員のお一人として、昨年四月の会合には元気に出席された。一年も経たない内に逝かれるなど思っても見なかった。六十周年記念号の編集委員でもあった。作者とはその時以来の交友があったのだろう。「笑顔の教へ忘るまじ」が生きている。ほかに、〈思ひ出が思ひ出を呼ぶ花の雨田嶋洋子Ⅴなど、追悼の句は多かった。

淡雪にともす会津の絵らふそく　　片山　博介

今年の春先は、関東の地にもくり返し大雪が舞った。それは作者の住む京都でも同じだろう。そういう春の雪も三月に入ると淡雪となる。京の淡雪はことに風情がある。降るともなしの淡雪の宵、作者は一本の蝋燭を点して窓外に見入る。蝋燭は「会津の絵らふそく」。一編の詩を読む思いだ。「会津の」が一句の核となり詩情を深める。

青き踏む詩の未来を信じ踏む　　小山　繁子

三月本部句会の特々選句。「青き踏む」の季語には、歩みゆく前途への希望の思いが宿る。好きな季語である。この「詩」は、俳句、短歌、仔情詩の全て。その詩の未来を信じつつ踏んでゆくという思いは、踏青という言葉の持つ希望の思いと重なる。一句を誦していると、「踏む」という繰返しが、一句を包み込んでいる事が良く分かる。

PDF= 俳誌の salon